

能「定家」鑑賞のポイント

作者／金春禅竹 季節／初冬 所／京都上京千本辺り
前シテ／里女 後シテ／式子内親王の霊
ワキ／旅の僧

全編を通して降る時雨―一味の雨

能「定家」は、北国からやってきた旅の僧が時雨に合うところから始まります。時雨は秋から初冬にかけて降ったり止んだりする雨。藤原の定家卿はその風情を愛し、時雨の亭（しぐれのちん）を建て、しばしば歌を詠んだと言います。「時雨の時を知る心」として「偽りの無き世なりけり神無月誰がまことより時雨初めけん」と詠んだ歌が本能の中にも登場します。

また、旅の僧が式子内親王の苦患を解くために唱える法華経「葉草喩品」は、仏が平等に法を説くことは雨が一樣に降ると同様に草木にも洩れることなく行き渡るといふものです。その一味の雨によって式子内親王の墓に這い纏った定家葛も解けてゆきます。このように「定家」では時雨がキーワードとして大きな意味を持っています。

執心からの解脱か、解脱への執心か

「定家」の作者、金春禅竹は世阿弥の娘婿で、世阿弥はその才能を高く評価していたと言います。禅竹は連歌や和歌、仏教や神道に深く通じていて、歌道や仏教の世界観を活かした作能をし、幽玄かつ深淵な能で知られています。「芭蕉」や「雨月」「松虫」など他の作品も、救いを求める人の心情と仏の救いに深遠な世界を作り出しています。

「定家」は勅撰和歌集である『新古今和歌集』の選者である定家卿が当時歌人として才能を高く評価された式子内親王と深い契りを結び、その死後にも深い思いから蔦葛となって内親王の墓に這い纏わりついたという物語ですが、定家卿は一切登場せず、シテの式子内親王が登場するだけです。男の深い執心に苦しめられるシテを通して執心からの解脱を描いています。内親王が墓に戻る最後の場面は解脱の意味を改めて考えさせられます。

瘦女の面と特殊なハコビ

「定家」の後シテは瘦女という面を掛けて現れます。高貴な生まれの式子内親王の品位と隠さねばならぬ悲恋の苦悩をこの瘦女の面が表しています。喜多流では瘦女をつけると摺り足から独特の足遣いに変えて舞います。通常なら序ノ舞は美しい摺り足で舞うものですが、苦悩を抱えたまま舞うことをこの足遣いが表現していて、見どころの一つとなっています。